

2009

平成 21 年 12 月 発行

社団法人 日本山岳会 千葉支部



J・A・C

(第 9 号)

千葉支部だより

発行者 篠崎仁
編集者 結城純一

“全員参加” で成功させよう『房総半島分水嶺踏査事業』



9月発行の「千葉支部だより」第8号で掲載の通り、支部が取り組む房総半島分水嶺踏査事業がスタートした。篠崎仁支部長らによる県庁での記者会見を受け、同事業について共同通信社が全国に記事を送信。通信記事を産経新聞が掲載後、千葉日報、読売新聞、朝日新聞が相次いで取り上げてくれた効果があり、県民参加によるイベントを兼ねて開催した「第1回踏査」は約80人を超える参加者で盛り上がった。

踏査のために用意した黄色いジャンパーを着た支部会員が班長になり参加者をとりまとめ、

1人の脱落者、けがもなく、全員が長柄町の権現の森から分水嶺ピークの高星山を踏み、長南町の笠森観音まで約13^{キロ}のコースを完歩した。途中、自衛隊市原通信所あたりからは東京湾、また標高150^{メートル}ほどの高星山からは茂原市の町並みや午後の波光ひらめく太平洋を見ることができ、房総の分水嶺を歩く実感が味わえた。

道ばたには色とりどりのコスモスやカラスウリの赤い実が揺れて、参加者に歩く疲れを忘れさせていた。

同事業は、その後も「笠森観音から野見金山」、「野見金山から山内ダム」(25000図『鶴舞』)と南に向けて進んでおり、この「支部だより」がお手元に届くころには「羽黒山周辺」(同『大多喜』)になるころだと思われます。

「野見金山」の三角点はゴルフ場の中にあたり、バラの刺のヤブの突破など、高さこそないものの房総の山は読図も難しく、結構、難航しています。

何より、「長いヤブを抜ければ、ゴルフ場だった…」といった具合で、開発という名の自然破壊を目のあたりにしているというのが現在までの感想です。

踏査にあたっては公共交通の便がないため、会員がマイカーを相乗りして「アリの歩み」で実施しています。多くの会員参加で実施していきたいという方針の下、「おれも参加するよ」という方は、櫻田会員や山口会員、または三

木まで声を掛けて下さい。現在の踏査地などをご連絡いたします。また、「誰もが参加しやすい踏査」のあり方を模索しています。

今後ともよろしくご指導下さい。

(三木 雄三)



羽田氏講演会・山岳映画上映会に参加して

市の広報で「山の映画会」というお知らせを見、早速カレンダーに印をして「久しぶりに行ってみようか」程度の軽い気持ちで参加しました。うっかり「日本山岳会千葉支部」という主催者のお名前もあまり重要視せずに、よくある旅行会社の説明会程度の認識で出かけましたが、全体の感じとして「想像していたよりも、随分格調高いな!」という印象でした。



当時実際に登られた方々、映像を映された本人のお話等、滅多に得られない機会に恵ま

れ、何故か全く山も知らない中学時代に見た横有恒さんの「マナスルに立つ」という今では内容も定かに覚えていない映画とダブって拝見しました。

「チョゴリザ」は数年前に夫が行ったバルトロ氷河の話や写真を思い浮かべながら、聞いた事のある地名などもありましたが、今でも簡単には行きにくい場所の遠征ではさぞ金銭・装備・手続等々、登頂という事にも増して大変な事だったのだろうと映画を見ながら感じました。

「ナンダコット」の方は数十年前の昔、合宿の天幕の中・帰りの汽車の床で歌った「神の御座か巨人の城か・・・ナンダコットは二万尺」アーこれの事だったのか!と映像と歌が結びついて何故かドキドキでした。

私自身の青春時代の山行、又その幾昔前?の熱き思いで山へ行かれた方々の共通

点、そして現在多くの人が参加しているツアー登山との違いや、少し“キザ”な言い方をすれば、山を愛する心は皆ずっと同じじゃないという感想を持った一時でした。

そして、キスリング・オーバースポンの時代から、カラフルな雨具・ストックを持ってツアー

登山に参加する自分が、頭の中をグルグル回り、一人ニヤニヤしながら感動して帰りました。

(平林晴美)

東大秩父演習林・自然観察会



期日：2009年11月7日(土)～8日(日)

参加者：梅本知榮子、小沢けい子、川越尚子、櫻田直克、篠崎 仁、鈴木美代、諏訪吉春、
田代貴征、田代治子、豊倉さと子、南井英弘、結城純一、岩尾富士夫、

以上13名

11月7日 妙法ヶ岳(1329m)

電車班は車の結城さんが10時に西武秩父駅でピックアップし、11:00に三峰神社ビクターセンター駐車場へ。車班もその時刻に集まり全員集合した。

あまり風もなく、絶好の秋晴れのなか出発。駐車場より直接、一ノ鳥居に上がる。右に雲取方面の道を見送り、妙法ヶ岳へ向う。多少のジクザクをへて、なだらかになり斜面をからむように行くと、鞍部にある二ノ鳥居にでる。こ

こから左の尾根どうしに行く。ハシゴなどあり面白い。最後の岩につけられた手すりに頼って上がると、妙法ヶ岳の頂である。ここまで歩行約1時間。頂には小さな祠があり奥の院である。山頂の巨岩を神にみたと、祠を奉りそれを狼が護るという、山岳信仰から来ている。ならんで秩父宮殿下御登頂記念碑がある。南を見ると霧藻ヶ峰、その先に白岩山か。雲取はその奥で確認できない。ここで大休止、昼食をとる。帰りは往路を戻り、駐車場から三峰神社へ参

詣する。

その後2台に分乗し、今宵の宿、民宿「甲武信」へ向う。途中で今宵のアルコールを調達する。宿は大滝栃本の山中で、山の香りのする築100数十年の建物である。夕方、明日の自然観察会の理解を深めるための事前講習を、演習林の技術主任の大村氏から、皆車座になって受ける。

概要は、1916年(大正5年)設立、甲武信岳を盟主とする奥秩父連峰の山々に抱かれ、5,812haあり、地形は荒川の谷が深く浸食し、V字谷を形成する壮年期の山岳地形である。林況は人工林、二次林、天然林からなり260種の樹木がある、等などのレクチャーを受ける。地味な、根気のいる研究にたずさわり感銘をうける。



さて待望の夕餉である。川越さんの音頭で乾杯し美味しい料理をつつきながら、懇親を深める。呑み助達はその後、部屋でアルコールを楽しんだ。

11月8日 東大秩父演習林(滝川原生林)
梅本さん、田代夫妻を見送り、10名で9:00に演習林の千島氏の案内で、演習林に向う。新国道140号に出、演習林の下に車を置き、他の車で演習林の入口まで移動する。ここはその演習林の中で滝川原生林と言う。ここで今日の予定の説明を受ける。330m下って滝川を渡し、標高900mまで上がるコースである。

まず樹木園を下っていく。幅広い緩やかなジグザクの道を、落ち葉を鳴らしながら歩くのは気持ちが良い。大きな木にプレートがあり、

この木の里親が記入されている。一口10万円で演習林の維持管理費用に利用される。要所、要所で説明がある。尾根部の乾性な所

にツガの優占する針葉樹林、山腹斜面の適潤な所にイヌブナあるいはブナ、谷沿いあるいは凹地形の湿潤な所にシオジ、サワグルミの優占する落葉広葉樹林が分布する。木々の見分け方(イヌブナとブナ、カエデ、檜とサワラ等など)など。



樹木園をすぎると、滝川まで下降し橋を渡る。ここからは細く作業道のようになり、落ち葉が積もり慎重にいく。途中沢を渡し、850mラインまで登る。小休止後少し登り尾根をからむように水平に歩く。ここまでは道も細く説明ポイントが少なく、歩くのみで要所にクサリがある。広くなった休憩ポイントで昼食をとる。ここから人工林をジグザクに下る。途中ドラム缶を二つ繋いだものがあった。以前熊の生態を調査するための、捕獲わなである。ミツバチの巣箱を入れ、おびき寄せ20~30頭捕獲し身長、体重など調べ発信機をつけ、放す。なぜか繰り返しドラム缶に入る熊がいるそうで、麻酔(銃)中毒か、美味しい餌に釣られてか分かりませんとのことである。沢を渡る箇所がすこしいやらしく、皆苦勞する。下っていくと、対岸に車の音がして登りが7分と言う。滝川にへんてこな、つり橋が現れた。ワイヤーに吊られた橋を渡る。渡り終わると千島氏がなにやらカチャカチャやっている。ワイヤーウインチで、ワイヤーを引き上げつり橋を上方へ引き上げている。何やってんねんと聞くと関係者以外の侵入を防止するためと云う。ここから急登をいくと国道に出た。ご苦勞様と、全員で記念写真をとる。

車を回収し、千島氏にお礼をのべ、帰路につく。秩父市に近付くと渋滞が始まり、西部秩父駅で電車組と別れ、帰路についた。

自然観察会は初めての参加であるが、今ま

でわき目もふらず歩いていたのだろう。聞くことが新鮮で、情報が多くいくらも頭に残らなかったのは、残念である。

(岩尾 富士夫)

養老溪谷芋原沢遡行(大福山・梅ヶ瀬溪谷)

日 時: 2009年11月15日(日)

参加者: 芳賀孝雄・南井英博・竹島正義・高橋正彦・佐藤明夫・石岡慎介・三木雄三・渡邊信一
同渡邊夫人・能美勝弘・同瑞穂・大浦陽子・金子有美子・宇津木仁典・
横田幸子・櫻田直克

今回の山行は養老溪谷沿いの大福山と房総で最も美しい紅葉と浸蝕崖が見られるハイキングの予定だった。しかし当日に幹事の提案でコースの変更した結果は、沢に迷い込んで大福山へは行けない山行となった。故に正タイトルを副タイトルに変更した。参加者は16名。運行している小湊鉄道はJR五井駅から上総中野駅間の39.1km、18駅単線のローカル線である。18駅中有人駅は5駅で13駅は無人駅です。乗客数が最も多い上総牛久駅でも一日乗客数750名、最も少ない飯給では9名である。またこの線では読みにくい駅名があり海士有木、飯給は、前者がアマアリキ、後者はイタブと読む。下車駅も無人駅で我々16名と他に2名だった。コースを変更しスタート。線路を渡り左手の道を行く。この道は途中から女ヶ倉橋経由して上古屋敷で合流するコースもある。今回選んだコースは芋原川に沿って上流を目指す。途中で人為的に削られたようなほぼ垂直に近い岩壁が見える。岩壁といっても花崗岩のような岩ではなく、海が隆起して出来た砂岩か粘土岩または泥岩のようで登攀には無理のようで、柔らかくもろい岩のようだった。幾つかのトンネルを越えると舗装路も終わり登山路

に変わってきた。さらに上流へと進むと道が無くなり沢になる。登山道のようにあるが、歩いた形跡が無く判別がつかない。地図を見直すルートは間違っていない。しかししだいに道は無くなり沢になる。前日の雨のせいもあるが完全に沢となり、水量も少なくなり道幅も狭くなり一部はヤブをかき分け進む。更に斜度も急になり行く手を阻む。先頭隊が偵察に行く。林道のガードレールが見えるが周りは垂直の岩壁で進むのは不可能であった。高度計の標高は285mを指していたので大福山の直下に到達していたようだ。時間は12時を回っていたので引き返しての登山は無理と判断し、下山を決める。途中沢の分岐点で昼食をし、その間芳賀さんら数名が沢をルート偵察に行くがやはり岩壁で無理であった。帰路は養老溪谷駅まで歩き、駅では足湯に入り疲れをとる人、店でビールを飲む人、何もせず電車発車までぼんやりする人など様々でだった。今回は当日にコースを変更したため沢遡行になってしまい反省しきりの山行であった。

(櫻田直克)

年次晩餐会記念登山「鋸山」に参加して

平成21年度の日本山岳会恒例の年次晩餐会が12月5日午後6時から東京・品川グランドプリンスホテル新高輪大宴会場の「飛天」にて、今年も皇太子殿下の御臨席のもと、全国から500名弱の多くの会員が出席し盛大に開催されました。それに先立つ午後2時より隣接のレセプションホール「さくら」において、支部おすめの花の山と題して、全国27支部からの展示があり、千葉支部は「麻面原高原」の紫陽花を展示しました。



翌日の記念山行は千葉の名峰・鋸山に決まり、主催者の集会委員会と千葉支部委員の手伝いにより全国の参加者会員をお迎えする事となりました。つい一週間前の天気予想とは打って変わり、当日は風もなく陽光が降り注ぐ小春日和で、絶好の登山日和となりました。我々、千葉支部委員11名は記念登山恒例の「トン汁」作りと登山の案内を受け持ち、午前9時半に全員が日本寺東口の無料駐車場に集合し、集会委員の方が用意した、約150名分の豚汁の具材、水、コンロ等のかかなりの重量の荷物一式を息を切らしながら、階段を登り昼食場所の大仏広場へ運び上げました。バス2台に分乗し、80有余名の参加者が日本寺表参道から登って参りました。我々一同は揃いの千葉支部特製の黄色いジャンパーを全員が着込み、参道管理事務所の仁王門でお出迎え、早速、千葉支部と大きく書かれた黄色いジャンパーの効果か、参加者の皆さんも我々に機嫌よく挨拶を交わされ、今日の天気のように

に気分爽快のご様子に安心しました。ここから、豚汁作りの4名と、登山組の7名に各々別れ、登山組7名は先頭と中間と最後尾に各委員が分担し、大仏前参道を歩き、大仏口管理事務所の階段を登り、弘法大師護摩窟を抜け、不動滝から十州一覽台の浅間神社の眺望をみて、西口管理事務所まで戻り、今日のメインである百尺観音、地獄覗きの山頂展望台へと向かいました。昨日の雨のお陰で、不動滝からは珍しく間断なく水が落下し小滝となり折からの陽光に妖しく光る様は実に美しい光景で、参加者の方も写真撮影をしておりました。百尺観音のスケールの大きい房州石の天然彫りの観音様はやはり、皆様珍しく思い、感嘆の声と記念撮影のシャッター音があちこちから聴こえて参りました。地獄覗きに息を呑み、山頂展望台からのキラキラ光る東京湾の雄大な眺望を楽しんだ後、下山は千五百羅漢道の夥しい石仏像を見ながら急な階段を下り大仏広場に戻りました。時刻も11時半を過ぎて、急な階段の上り下りで心地よい汗を流した後は、いよいよ、トン汁の昼食休憩となりました。三つの大鍋で作りましたトン汁は大変好評で大勢の方がお代わりを所望し、みるみるトン汁150名分がなくなりました。さすがに、前夜から準備いただいた集会委員の方の自慢のトン汁は美味しく料理の手順の良さは豊富な経験の賜物と感心致しました。



大仏様をバックに全員の記念写真を撮影し、無事に参加者全員を東口駐車場から出るバスでお見送りしましたが、皆様、バスの中から千葉支部会員に手を振り、心から満足そうなお様子に一同、安堵いたしました。

その後、我々11名とトン汁担当の集会会員

2名の13名は打ち上げ会を、「ばんや」にて開催した事は言うまでもない事です。当日、お手伝い戴いた千葉支部会員(篠崎支部長、吉永氏、南井氏、石岡氏、櫻田氏、佐藤氏、結城氏、豊倉さん、津田さん、小沢さん、諏訪の11名)の皆さんお疲れ様でした。(諏訪吉春)

チョゴリサ登山隊長のこと

私は一生のうちに一度はヒマラヤへ行つてみたいと夢を描いていた。運よく加藤泰安氏の推薦で桑原武夫隊長の率いる1958年チョゴリサ登山隊に参加することが出来た。この年カラコルム・バルトロ氷河へ入った登山隊は日本隊のほかはクリンチ隊長の率いるアメリカヒドンピーク隊とカシン隊長の率いるイタリアガッシャブルムIV隊であった。

チョゴリサは8月4日藤平・平井の両隊員によって18時間のアルパイトの結果登頂された。アブリッジ公・ヘルマンブールを撃退した花嫁の峰も我々によって遂に登られた。チョゴリサ第四キャンプ6700mの少し下がったところにヘルマンブールのテントが1年間の風雪に耐えて淋しく残されているのを発見した。その時あの超人的なヘルマンブールがまだ生き残っているような気がした。ブールの遭難は登山家としての運命的な遭遇と思うような気持ちになった。第四キャンプにて夜一人でカラコルムのきれいな星空を眺めているとブールの亡霊が出そうな薄気味悪い思いをしたことを思い出す。

チョゴリサ登山を終えて休養をしていた8月12日、イタリア隊のフスコ・マライーニ副隊長、ガッシャブルムIVの登頂者ボナッティ他2名の隊員が私たちのベースキャンプを訪ねてきた。

マライーニは、戦前、日伊交換留学生として

北大・京大に学んだ民族学者であり、登山家・旅行家・写真家・著述家でもあった。私たちのキャンプを訪ねたマライーニは、流暢な日本語で「日本のお菓子と美味しい日本茶を所望する」ときたから私たちは驚いた。キャンプでは貴重な羊羹は、通常5mm以上の厚さに切ってはならぬ、という隊長のお達しもこの時ばかりは二倍の厚さに変更されて、私たちもお相伴に預かることが出来たことが懐かしい。

マライーニは4年前92歳で亡くなった。その葬儀がフィレンツェの旧市庁舎で行われた様子をイタリア在住の谷泰氏から私たちに伝えられた。「片手にトランペットを持った市の儀仗兵が三人、フィレンツェ市長と共にやってきて告別式が始まった。多くの参列者の最後にチベットの僧侶が三人読経、市の祭服を着た楽師の哀悼のためのトランペット吹奏で式は終わった。カトリックの国イタリアで、彼の意に沿った国際的な簡素な葬儀であった」と。私はあのチョゴリサのベースキャンプを訪れた若き日のマライーニを偲んだ。

もう一人の訪問者のボナッティは、アルプスの数々の北壁やドリュの西壁登攀等の大記録を持つヨーロッパを代表する登山家である。クールマイヨールで夏は登山ガイド、冬はスキューチをしていた。澄んだ青い瞳で男も惚れるハンサムな青年で、その静かな物腰の中の何処にあの様な登攀記録を達成する精神力

が隠されているのかと若かった私は不思議に思った。

ヘルマンブールはボナッティの友人であった。私たちは発見したブールのテントの中から山日記、コッフェルなどの遺品を持ち帰っていたので、それらをボナッティに渡す事ができた。彼はそれらの遺品を、ブールの未亡人に持ち帰ることができることを喜んだ。もしアルプスに来ることがあったら是非クールマイヨールの私を訪ねてきてほしいと言った。しかしイタリアのアルプスを訪ねることは実現していないが、十年程前ボナッティが元映画スターで愛妻のロッサナ・ポDESTaと共に来日した時に再会を果たし、喜び合った。彼がのちに優れたドキュメンタリーの作家になったのは、マラーニの影響を受けたようであった。

私たちのベースキャンプ訪問の終わりにイタリア隊の四人は、お茶のお返しにと、イタリア民謡「大尉の遺言」「フニクリフニクラ」を見事な三部合唱で歌ってくれた。一方、私たちは寮歌やデカンショ節がせいぜいというところで、お粗末なものであった。

お互いの登頂成功を祝って別れを告げ、帰路につくイタリア登山隊員の後姿が、これまた決まっていた。グレーのチロルハットにグレーのフラノのニッカボッカ、エンジのセーターにエンジのストッキングといういでたちで、スティールストックを使って軽やかに氷河を下っていた。

イタリア隊が帰った後、桑原隊長からは次回遠征するときは、三部合唱で歌える唄を用意しておくようにと、更に服装に関しても国際交流に恥じないスタイルを心掛けるようにとの言葉があった。

1978年登山隊長の桑原武夫先生が文化功労賞を受賞された。その時、私とチョゴリサの隊員仲間の岩坪五郎氏が、ある新聞に桑原先生について寄稿している。彼はその中で、チョゴリサ登山隊の話を持ち出して、我々若い隊員が桑原先生から受けた教育について書いている。キャラバンの間、毎晩のように桑原先生の文化講演を無料で聴けた、と。そして

それは、自分が学校で学んだことの数倍の値打ちがあるものだったと述べている。私も全く同感であった。

若い隊員は、先生のお話に聴き入り、その深い学識や経験からほとぼしりである哲学や人生観、文化論から世渡りの方法まで、実に多くのものを学んだ。

隊員各々の役割分担があり、渉外係、食糧係、装備係等々誰でもどうしても英語で折衝しなければならない時があった。桑原隊長は、英語の上手、下手に関係なく隊員が英語を使う時誰の助けも借りず、相手がわかるまで頑張って話すようにと厳しく言われた。これはなかなか難しかった。私は装備担当で外国隊の訪問の折、装備の説明を命じられた。その時は自分の下手な英語が恥ずかしくて声になって出てこなかった。隊長はお見通しで「英語の下手なのは、日本人だから当たり前や。お前が恥ずかしいと思っているのは、英語が通じないと言うことよりも、隣で聞いている俺や、仲間こんな文法的間違いをしたら笑われるだろう、ということが先に立って、思うように言葉が出てこないのだ。回りの日本人を気にするな。外国人は日本人の英語が下手なのは当たり前と思っているのだ。ええ恰好しようと思っていれば、これから国際人になれる。」といった次第。私は先生のお陰により人前で英語をしゃべる心臓だけは太分強くなってしまった。しかし肝心の英語の方は、現在もいささかも進歩していない。遅すぎるが大いに反省している。桑原隊長から受けた数々の教えにお礼を申し上げたい。

50年前の楽しい遠征を思い出す今日この頃である。現在アメリカのグローバル政策の影響によりイラン・イラク・パキスタン・アフガニスタン等イスラム世界は不安な社会に陥っている。カラコルム・ヒンズークシ地域へちょっと行こうかという時代ではなくなったことが悲しい。

半世紀が過ぎてもカラコルムの一部・カシミールの地域は現在も紛争が続いている。早く平和が回復することを願うものである。

(芳賀孝郎)

錦秋紅葉の涸沢



(涸沢ヒュッテ・テラスより穂高連峰)

10月3日から6日まで5年ぶりに岳友10名で上高地・涸沢に行ってきました。事前の気象予報だと雨模様でした。新宿発7時、大月付近で雨が降り始めたが松本では曇りでした。松本駅からバスで上高地に向かうと山間部に行くほど晴れてきました。我ら登山グループは平均年齢70才を越えているが、いずれも山のツワモノぞろいの元気な山男達です。今回の登山は奥穂高岳又は北穂高岳、上高地の焼岳に登る予定でした。初日は槍ヶ岳と穂高岳登山の分岐点である横尾山荘泊。翌日は涸沢を目指して歩きだす。30分ほどで左側に朝日に照らされ真っ赤な垂直岸壁の屏風岩が見えてきます。まもなく沢にかかる橋に着き、ここから急な登りが始まり本格的登山です。背中の荷が肩に食い込む、足元を見ながらゆつくりと登って行きます。約1時間登ると斜度が緩やかになりやがて目の前に紅葉越しの穂高連峰が見えてきました。涸沢ヒュッテが間近になると、足が自然に早くなります。ヒュッテに到着、荷をおろし眼前を見ると今までの苦しい登山が吹き飛ぶような晴天でした。思わず「ワー」、「ウォー」の歓声。涸沢へは何回も訪れていま

すが紺碧の空は数回くらいでした。紺碧、紅葉、雄大なアルペン風景を満喫しながら、ヒュッテの展望台で800円の生ビールジョッキで乾杯。この光景はヨーロッパアルプス登山時の風景を思い出させます。欧米では山のテラスでお茶や食事でのんびり1日を過しますが、まさにそんな風景でした。あまりの絶景にビールがはずみ、持参した酒・焼酎を飲みだし宴会の様相。「歌を忘れたカナリヤ」ならぬ「山を忘れた山男」で登山どころではなくなりました。これでは、翌日上高地まで下山し、それからの焼岳登山は無理、横尾山荘に泊まることにしました。しかし私は左足靭帯切断のため登山を断念し、涸沢ヒュッテに宿泊。私以外の人たちは横尾へ降りました。夜は自分ひとりで満点の星空に感動、また中秋の名月も見事でした。翌日上高地に下山し、焼岳登山した仲間たちと合流しました。途中「山研」に立ち寄り、5月に宿泊した時に撮った子供の写真を管理人の内野さんに渡してきました。上高地に宿泊し翌日帰路に。今回は気象予報の外れが幸いしラッキーな登山でした。(櫻田 直克)

講演会のご案内

千葉科学大学危機管理学部動物環境システム学科の学生向けに開催されるものですが、市民の皆さんの聴講も予定しています。岩坪先生は四手井綱英・京大名誉教授の直弟子ですが、京大学士山岳会のチョゴリザ遠征隊員で、ノシャック登頂、K2 遠征隊長などで活躍された JAC 会員でもいらっしゃいます。今回は、「山」に執筆されました「森林と人類」、「環境と森林」を中心にお話しいただきます。朝早いですが、多くの会員のご来聴を歓迎致します。

題目 人類と森林

演者 岩坪五郎・京大名誉教授(森林生態学)

日時 平成 22 年 1 月 8 日(金)午前 9 時 05 分～10 時 35 分

場所 千葉科学大学マリーナキャンパス防災シミュレーションセンター

〒288-0025 銚子市潮見町 25

千葉科学大行きバスの銚子駅発

(8:03 8:15 8:35 8:42 8:53 所要 11 分)

世話人 遠藤将一(千葉科学大学教授)

「伊能忠敬」講演会のお知らせ

千葉支部では香取市との共催で、1月24日に日本地図の「生みの親」伊能忠敬の旧宅がある香取市の佐原中央公民館で講演会を開きます。講師は伊能忠敬研究会の代表理事で日本山岳会茨城支部支部長の星埜由尚さんです。伊能忠敬を生んだ佐原の町は今でも江戸文化の香りを残し、町内を流れる小野川の両側には古い町並みが点在。町を歩けば、江戸の昔にタイムスリップしてしまった錯覚にとらわれます。タクシーを使えば香取神宮参拝も可能です。

●公演料 無料

●交通はJR千葉駅の9番線から11時30分の銚子行きに乗車、佐原下車。改札口を出たら右手の跨線橋を渡ります。橋を渡ったところが会場の中央公民館。

●講演は13時30分から15時までを予定。公民館の前にレストランあり。待ち時間の間に昼食を取れる。講演後は町並みの散策はいかが。佐原には、利根川名物「うなぎ」の店もたくさん。

●帰りの足は17時53分、18時21分、19時15分の千葉行きが便利。

●会場の定員は150人です。

問い合わせは三木雄三

第三回 栃木・茨城・千葉三支部合同懇談会のお知らせ



三支部合同懇談会は2007年度に首都圏の支部としては初めて、栃木、茨城、千葉の三支部が設立した事を記念し、毎年同時期に合同懇談会を開催しております。第1回目を栃木支部が担当し、今年は千葉支部担当、来年は茨城支部が担当幹事となり開催されます。今年の千葉支部の合同懇談会では茨城支部会員の多数の参加を戴いており、多くの会員諸兄弟にご参加いただきたく案内申し上げる次第です

期日 2010年2月6日(土)～7日(日)

宿泊場所 ホテル『一望』 茨城県つくば市筑波 64-2 TEL029-866-2222

会費 1万3千円 (宿泊2食付、懇親会費、入浴代など含む) タオル、浴衣付き

集合場所 国土地理院(地図と測量の科学館) つくば市北郷1番

2月6日(土)

国土地理院を見学後、ホテルに移動

2月7日(日)

筑波山登山(昼食は、御幸ヶ原の仲の茶屋にて、つくばうどん)

朝食 7:00 8:00 にホテルを出発し筑波山神社へ、全員御祓いを受ける

歩かないでケーブルカー利用の場合、山頂近くの自然研究路散策

集合13時30分受付開始ー14時から説明と館内案内(貴重な資料を展示)

車利用の場合、国土地理院(Tel029-864-1872)

電車利用の場合、秋葉原駅発つくばエクスプレス線利用(片道 1,150 円)

葉原駅 12:00ーつくば駅 12:45 秋葉原駅 12:15ーつくば駅 13:07

つくば駅そばのバスセンターから、サイエンスバスの(北周り)13:21 13:56

高速バス利用の場合、(片道 1,150 円)

東京駅八重洲口 11:30ーつくばセンター駅 12:35 12:00 13:05

※参加申し込み締切12月30日(水)まで、ハガキ・電話・FAX

連絡先:幹事 諏訪吉春

三木雄三

『房の大山』へのお誘い

房総半島の南端に「房の大山」という193mの小さな山があります。

小さくても伊豆の大島、富士山、千葉の山々と展望は第1級で、おまけに国土地理院の三角点が設置されています。三角点、普通は「+」なのに対し、ここのは「○」。

何とも面白いではありませんか。館山駅の「くじら弁当」は季節限定。おいしいですよ。

早春の3月6日(日曜)に実施します。

交通の便が悪いため、20人乗りのバスをチャーターします。定員になりしだい締め切ります。

集合は千葉三越前に朝8時、8時半に出発します。

問い合わせは三木まで。

★ JAC千葉支部ジャンパー販売のお知らせ

「分水嶺踏査」の記念事業とあわせて作った「支部名」入りの黄色いジャンパーに若干の在庫があります。

購入を希望される会員、会友は担当の津田麗子さんと連絡を取って下さい。なかなか好評です。

(三木雄三)



(背面)

★訂正

支部だより第8号の「納涼懇親会」で、参加者の名前に誤りがありました。

能見勝博は能美勝博さん、能見直子は能美直子さん、吹野義典は吹野義憲さんです。

お詫びして訂正します。

● 編集後記

今回の会報「講演会・上映会」の原稿で書いて頂いた平林さんは、一般の方です。今までは会員や会友の向けの企画でしたが、分水嶺や伊能忠敬の講演会のように一般の方を対象に企画作りを考えています。「こんな企画は？」とかありましたら気軽に委員に話して下さい

(結城 純一)